文化財学習会

ふ　る　さ　と　探　訪

テーマ　川岡の新緑と水をめぐる

講　師　廣瀬和孝

（香川県文化財保護協会　副会長
高松市文化財保護協会　顧問）

平成２２年５月２３日（日）

共　催　高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

１　岡本町

平成１８年の合併前は高松市南西端に位置していました。明治２３年（１８９０年）に岡本村、川部村が合併し川岡村が成立しました。昭和３１年（１９５６年）高松市と合併し、高松市岡本町となりました。町の北部を東西に国道３２号とコトデン琴平線が通っています。コトデン岡本駅の南に貯水量１４４万７千ｔの奈良須池があり、４５０ヘクタールが灌漑できます。池の東にある標高１００ｍの耳塚山が堤防でつながり、絶好の散歩道になっています。

２　岡本遊園地跡

昭和１２年（１９３７年）完成した岡本遊園地は健全娯楽場として市民の数少ない楽しみの場となっていました。

この遊園地は琴平電鉄株式会社が地元川岡村と協力して奈良須池を中心に造成した施設です。工費１万円を投じて建築し、１万人を収容できる露天演芸劇場をメインに、湖上歓楽場を造っていました。各種売店も整備され、夏には花火大会、秋には菊人形展が開催されました。昭和１５年（１９４０年）の「紀元二千六百年建国の夕べ」もここで行なわれ、会期を１０日間延長するほどの賑わいでした。戦時中、高松市民の

屋外娯楽の場は岡本遊園地であったといえます。しかし、戦争等の拡大により、昭和１８年（１９４３年）を最後に相次いで廃止になりました。

【岡本劇場】

戦後長い間娯楽に飢えていた人々は、かつての遊園地や演芸場の復活を望みましたが再開はされませんでした。昭和２１年（１９４６年）大衆の要望にこたえるため竹製品製造工場の一部を改造して芝居小屋とし、「岡本劇場」としました。高松旧市内の劇場や映画館はほとんど焼失していたため、連日満員の盛況でした。その後芝居小屋の施設が老朽化し、手狭となったので、新築するとともに映画を主とした経営に切り替え、名も「岡本映画館」としました。昭和４０年（１９６５年）大衆娯楽の施設が高松市中心部に移ったため廃館となりました。

【平和劇場】

昭和１８年（１９４３年）以降廃止になっていた岡本菊人形、第２演芸場の舞台装置・照明等が使用可能のまま残っていたため、戦後「平和劇場」として復活し、演劇を主として上演していました。当時は岡本映画館と隣接していたため競い合い栄えて

いましたが、時代の変遷とともに廃館となりました。

3　奈良須池（貯水量　１４４万７千ｔ）

琴電岡本駅の東側に満々と水をたたえたこの池は、かつては大きなポプラ並木があり、遊園地や貸しボートもありました。また、昭和２５年（１９５０年）からは全国花火大会が開かれ、全国から花火業者が駆けつけて花火の製造技術を競いました。娯楽のない当時は大いににぎわい、家族揃って弁当を持ち見物に行ったようです。後には昼花火まで登場し、その華麗さは今でも見物人の語り草となっていますが、惜しくも５回で中止となりました。

この池の地には古く土庄池、上池、下池、よしま池と呼ばれる４つの池がありましたが、良田を十分に灌漑（かんがい）することができず、少し日照りが続けば、旱魃（かんばつ）に悩まされていました。正保２年（１６４５年）、承応３年（１

奈　良　須　池

６５４年）、寛文８年（１６６８年）には讃岐国は大旱魃に見舞われ、ことにこの地域の被害は甚大でした。寛文８年の旱魃には藩主松平頼重がみずから龍神に雨を祈願するとともに被災地の検分を行ないました。このとき同行した山崎村（現高松市西山崎町）の御蔵奉行前田与三兵衛はこの惨状を目にし、衝撃を受けました。このことがため池を築く動機となり、与三兵衛はこの地を最適と見て４池を統合し、水源は遠く香東川に求め、掛け井手によって導水する計画を立てました。しかしその都度困難に遭って成功せず、ついには「不成（ならず）」とよばれました。池の名の由来といわれています。到底無理といわれた不成の池も寛文１０年（１６７０年）に完成。当時の讃岐大池番付には、満濃太郎、神内次郎、三谷三郎に次ぐ奈良須四郎として付け加えられました。それまで小田池と４池に頼っていた岡本、川部、山崎、円座、中間、檀紙、飯田の７か村は一躍水量を増し、用水の潤沢を誇りました。下流では新田の開発も行なわれました。今や奈良須池周辺は高松市への上水道、工業用水供給地になっています。

４　鵜生池（うのいけ）（貯水量　３３万７千ｔ）

高松市岡本町・香南町と綾川町に接し、寛永３年（１６２６年）の大旱魃を機に谷

間で葦が一面に繁茂し、鵜が生息していた湿地に池を築き「鵜生池」と名づけたといわれています。文久３年（１８６３年）大旱魃の年に、畑田村（綾川町）と福家村（国分寺町福家）の間で水争いが起こり、大庄屋が仲介に入り、５か条にわたる「鵜生池用水水取方規定」を作り、また、ユル尻に分水石を据えて配水の公正さを図ることとしました。更に池の水溜りの量を確保するため池の中にも分水石が設置されました。これらの施設はすべて石造りで、その後何回かの修理の時も取り外されず、今に残され使われています。

鵜　生　池

5　小田池（貯水量　１４１万９千ｔ）

高松市川部町と香南町にまたがり、かつて白鳥が飛来したというので白鳥の来る池として有名です。この小田池は生駒４代高俊の時代、西嶋八兵衛が手がけた池で、７年の歳月を費やし、相当な難工事を超えて寛永４年（１６２７年）にやっと完成した

池です。平野部に築かれたため、周囲のほとんどが堤防という皿池で、容易に堤防が築けず普請奉行は大層難儀していました。池普請の人夫たちは「梅雨までに堤を築かなければ田植えができない。人柱でも立てなければ」とささやきあっていました。奉行に進言してもむごいことを聞き入れてはくれません。そうこうするうちに梅雨が長引き，またまた堤防が決壊してしまいました。水がはげしく流れ出る堤を見ていた人夫たちは，人柱をたてなければ堤は築けないと奉行に進言しましたが奉行は首を縦に振りません。すると、工事中の池のほとりを通りがかった２人の女性がいました。奉行は，意を決してこの女性たちを人柱にたてることにし、いやがる２人を池に投げ込み、人柱にしてしまいました。２人のうち１人は奉行の奥方、もう１人はお供の女性でした。まだ年若いお供の女性は、「奥様のお供で死んでゆくのですから、奥様より手厚く祀って欲しい」と言い残し人柱になりました。この女性は、「すわ」という名前で、奥方は『池明神』として、すわは一段高い山に『諏訪明神』として祀られています。２つの明神は小田神社、諏訪神社として地域の人々の信仰を集めています。また、小田池はカモ類の県下有数の越冬地で、（注１）ミコアイサが毎年渡来しています。迷鳥がよく飛来することでも有名で、マガン・オオハシシギなどが確認されています。

（注１）巫女秋沙（みこあいさ）

ユーラシア大陸北部の寒帯地方で繁殖し、冬季には、ヨーロッパ、カスピ海からインド北部、中国東部などの温帯地方に渡り越冬します。名前のアイサの由来は諸説ありますが、「秋が去った頃に飛来する」＝冬に飛来することに由来するとする説もあります。和名は、オスの体色を神子（巫女）に見たてたことが由来とされています。

6　小田神社

祭神　高靇神（たかおかみかみ）

旧川岡村村社八幡神社境外末社で、俗に池明神と言います。高靇神は闇靇神（くらおかみかみ）とともに雨をつかさどる龍神とされています。高は山靇神は山闇は谷の意味で龍神高闇靇神は谷をつかさどる龍神のことです。

小　田　神　社

7　諏訪神社

全讃史に『此の神は信濃諏訪郡に在り。是れ即ち大物主神の第二子、健御名方命なり。社傳に云ふ。（注２）一条帝の正暦五年、南海に賊大いに起る。時に諏訪五郎光秀と云ふ者あり。平惟時に従ひて、賊を征して南海に来り、遂に讃の香西郡河邊に留る。その後百余年、崇徳帝の大治の時に及び、諏訪の小目光親（さかん）と云ふ者在り。諏訪神を迎へて之

を祠る。天正の時、諏訪又衛門と云ふ者あり。土佐元親に従ひて香西の勝賀城を攻めて功あり。是れ則ち末裔なり。初め鳥羽帝の天承の時に方りて、高野に常光和尚と云ふ者あり。大師の舊迹を訪ひて此の邦に来る。諏訪小目の宅に投ず。時に国中（注３）癘疫（れいえき）あり。小目の家亦その患に罹る。和尚之を祈り患頓に除く。是に於て小目喜び、一宇を建てて和尚を居らしむ。因って号して諏訪寺と曰ふ。以って世々諏訪祠を主どる。建武の時に及び、細川右馬頭神田若干を献じ。川邊一郷の社と為す。是を以て中田井右馬允仁明之を脩む。室町氏の末に及び、世上専ら八幡を以て社と為す。是に於て八幡祠を立つ。此の祠遂に衰へたり。』とあります。

諏訪神社は諏訪山の中腹に鎮座しています。その拝殿までの石段は古く、歴史が刻まれており、鳥居には嘉永六年（１８５３年）の年号が入っています。

（注２）一条帝　第６６代天皇（在位９８６～１０１１）

諏訪神社

一条帝の時代は道隆・道長兄弟のもとで藤原氏の権勢が最盛に達し、皇后定子に仕える清少納言、中宮彰子に仕える紫式部・和泉式部らによって平安女流文学が花開きました。

（注３）癘疫　悪性の流行病

８　長福寺　諏訪山常光院　泉涌寺派

川部村の素封家武下氏ゆかりの寺です。明治初年、神仏分離により川部八幡神社の社僧常光院は廃されたため、武下家の当主養平は諏訪神社の北隣において墓所を改築するにあたり、聴松庵を建立して墓所の管理を行なわせるとともに、常光院の寺宝の散逸を防ぐためその収集に努めました。養平の意思は子孫に受け継がれ、その要請を受けて志度寺塔中金剛寺住職末葉宥恵が庵主となり、明治２７年（１８９４年）１２月京都泉涌寺塔中の一宇を移して寺号を長福寺と改めました。その際、武下隆太郎から土地・建物・書画・彫刻・仏具・書跡・雑器、大護寺（高松市）

長　福　寺

から仏像・書跡・雑器の寄付を受けました。長福寺所蔵の彫刻には、かつて常光院に所蔵されていた木造愛染明王坐像（平安時代）、木造十一面観音立像（平安時代）、木造毘沙門天立像（鎌倉時代）、木造阿弥陀如来立像（南北朝時代）など貴重な文化財が数多く含まれています。

9　眞光寺　真宗興正派

岡本村堂奥にあった（注４）三十番神堂は、天保１０年（１８３９年）６月、関係者の尽力により奈良須池畔の中山に移転しました。（嘉永３年９月に拝殿再建）慶応４年（１８６８年）に神仏分離令が交付され明治２年（１８６９年）に御神体は本堯寺に撤収されました。社殿は仏教各宗の説教所となり、やがて真宗の占有となりました。（眞光寺の本堂は旧岡本三十番神の拝殿）説教所は昭和２１年（１９４６年）に寺号を善照山真光寺としました。なお、紆余曲折を経て、明治４５年（１９１２年）説教所の西側に三十番神堂が建立されま

眞　光　寺

したが、昭和１６年（１９４１年）に池辺神社と改称、従前の御神体は本堯寺へ撤収されました。

（注４）三十番神堂

１か月３０日間、日替わりで国家安寧・衆生幸福を守るとされる三十柱の神々です。初め天台宗で信仰され、後に日蓮宗の系統（法華神道など）で盛んに信仰されました。

１０　池辺神社

奈良須池の北側に祀られている神社で、社殿の屋根が緑色、遠くからもよく目立っています。昭和１６年（１９４１年）大東亜戦争勃発により軍部の圧力厳しく、それまでの法華勧請の三十番神は池辺神社と改められ、以後山崎八幡神社の末社として祭祀されることとなりました。

昭和６３年（１９８８年）秋の大祭時に古材による建築のため自然劣化が甚だしく、雨漏れ・床の腐

池　辺　神　社

敗などが見られたので、堂宇の改築を試みたが進捗しませんでした。昭和５年（１９３０年）奈良須池西堤防で漏水が甚だしく決壊の恐れが出たとき、関係者一同が地元の三十番神社の神前の祈りを捧げ、難を逃れました。これを記念し、建立された記念塔を池辺神社として借用改築し、同年９月末に完成しました。

旧神社から三御神体、小田・奈良須両池事務所の先賢堂から一御神体を奉遷し岡本氏子により祭祀することとなりました。

１１　香川用水東部幹線水路

香川用水は、香川県の山間部及び島しょ部を除くほぼ全域に農業用水、水道用水、工業用水を供給しています。昭和４３年（１９６８年）財田町の分水工予定地で香川用水の起工式が挙行されました。高松市方面へ通水する東部幹線水路（７４ｋｍ）と三豊市豊浜町方面へ通水する西部幹線水路（１３ｋｍ）に水を分配する施設で、水中に含まれた砂等を取るための沈砂池もあります。

吉野川で取り入れた水が阿讃トンネルを通り、香川県に入って最初に地表に顔を出すところが東西分水工です。時期の通水量にもよりますが、３０分から１時間かけてトンネルを抜け、東西幹線水路の必要量に適正に分配された後、それぞれの目的地に向けて出発します。

香川への分水は、吉野川総合開発の一環として、昭和４３年（１９６８年）に正式決定しています。徳島県池田に建設する池田ダムから、三豊郡財田町（現在の三豊市財田町）まで８ｋｍに及ぶ導水トンネルを通し、そこから県全域を横断するように、西に１０ｋｍ、東に７３ｋｍの幹線水路を造る計画でした。

数々の最新技術が駆使されたこの事業は、昭和４７年（１９７２年）の池田ダム着工、昭和５０年（１９７５年）の完成と進み、昭和５４年（１９７９年）に幹線水路が完成したことで完了を迎えました。幹線水路から水を分ける分水工はおよそ１７０か所。香川用水の水は、既存のため池や水路、小河川へと補給され、平野のすみずみまで行き渡ることになります。自然の川、先人が造り上げたため池や水路、それぞれを結びつけながら県を東西に貫く香川用水。香川には、ついに安定した水利システムが築かれました。

吉野川総合開発は、原案作成から計画決定まで

幹　線　水　路

１６年の年月を要しています。実現までに、各県の並々ならぬ努力と苦労があったことは、想像に難くありません。開発事業の一貫であった香川用水も同様です。しかしながら、長かった水不足の歴史に終止符が打たれるはずであった２０世紀の大事業のひとつに数えられる香川用水でしたが、毎年のように渇水の不安に見舞われているのが現状です。

【参考文献】

『高松百年史上巻』昭和６３年３月３１日発行　高　松　市
『ふるさと川岡』平成１３年１１発行　川岡郷土史編集委員会
『水土里（みどり）ネット　香川用水ホームページ』